



Title	過去形の用法に見られる発話者の役割 : フランス語の「複合過去」の場合
Author(s)	安西, 記世子
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 93-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

過去形の用法に見られる発話者の役割

— フランス語の「複合過去」の場合 —*

安西 記世子**

Le passé composé français a deux fonctions principales. Il est employé pour exprimer un fait achevé dans deux perspectives, temporelle ou aspectuelle. La fonction du passé composé consiste dans la première perspective à présenter un fait dans le passé, tandis que dans la seconde, elle consiste à mettre l'accent sur les conséquences issues d'un fait totalement achevé. De nombreuses études consacrées à cette forme ont montré que l'*antériorité* et l'aspect *accompli* ou *parfait* sont la clef d'entendement de l'emploi du passé composé: *antériorité* par rapport au moment où l'on parle et *accompli* du fait parvenu à son terme final que l'on saisit au moment de parole. La remarque qui s'ensuit est que l'énonciateur évoque un fait pour l'amener en quelque sorte dans le présent.

Nous nous consacrerons donc dans cette étude à éclaircir l'interprétation donnée à un fait achevé par l'énonciateur lors de l'énonciation. Notre démarche sera de faire l'analyse de la *subjectivité* de l'énonciateur. Nous mettrons en évidence les rapports temporel et conceptuel qui existent entre le moment de l'énonciation et le moment où le fait a eu lieu.

Nous examinerons des exemples écrits et oraux recueillis dans différents enregistrements.

Nous espérons que notre analyse soulignera le lien entre le regard de l'énonciateur par rapport au procès et la fonction du passé composé.

* Le rôle de l'énonciateur dans la forme passée — Cas du passé composé français —
(ANZAI Kiyoko)

** バリ第4大学一般言語学科博士課程

0. はじめに

本稿では、フランス語の直説法の時制の一つである「複合過去」と呼ばれる文法形態について考察する。「複合過去」(以下、複合過去形)は、「助動詞の現在形＋動詞の過去分詞」という形式からなる複合時制である。助動詞は *avoir* または *être* であり、*avoir* は本動詞として「持つ、持っている」という意味を、*être* は、「いる、ある」という意味を表す。大部分の動詞は *avoir* を助動詞にとる¹⁾。複合過去形は、本来「完了」²⁾を表す形態であったものが、現代フランス語においては、「完了」というアスペクト的側面を残しつつ、テンスとして、広く「過去」の事態を示すようになった³⁾。

(1)では、複合過去形におかれた *mettre* 「入れる」という動詞は、過去の一時点を明示する語句と共に用いられて、「昨日10時に手紙を投函した」という過去の一過性の事態を表し、テンスとしての文法的機能を表している。

- (1) *J'ai mis* la lettre à la boîte hier à 10 heures pile.

I / **aux.pres** / **PUT.pp** / the / LETTER / prep / the / BOX / prep / 10 / O'CLOCK / JUST

私は昨日10時ちょうどに手紙を**投函**した。

一方、例文(2)では、動詞 *mettre* は「身につける」という再帰的行為を意味し、複合過去形は、行為の完了による結果状態の方に焦点を当てることになり、主体が「帽子をかぶった」ことによる「帽子をかぶっている」という結果状態が示されている。

- (2) *J'ai mis* mon chapeau.

I / **aux.pres** / **PUT.pp** / my / HAT

(Guillaume, 1938-39: p. 229)

私は帽子をかぶった。(帽子をかぶっている)

¹⁾ *être* を助動詞とする動詞は、主に場所の移動、状態の変化を表す若干の自動詞とすべての再帰動詞である。

²⁾ 複合過去形が表す「完了」にあたるフランス語は *présent parfait* (Brunot, 1936), *parfait* (Gougenheim, 1939), *accompli* (Riegel 1994) などがある。

³⁾ 複合過去形の研究史については、青木(1997)に明瞭な解説がある。

複合過去形が表す「完了」とは、発話時点(以下 T_0)以前に成立した事態の結果として生じた何らかの状態⁴⁾が T_0 において認識されることを意味する。

複合過去形の基本的意味をテンスに求めるか、アスペクトに求めるかについては、諸説あるが、本稿では、複合過去形が過去のテンス形態として広く過去の事態を表すようになった現代フランス語においても、現在との関連を示す文脈において用いられ、発話者の事態に対する主観的態度が介在していることを主張する。以下では、複合過去形の文の言語的意味を考察した上で、そこに見られる発話者の事態の捉えかたを明らかにしていきたい。これによって、発話者の認識と複合過去形の用法がどの程度まで関連しているかについてひとつの提案をする。

1. 発話時点と事態の時間的つながり

Gougenheim (1939)は、歴史的な考察を基に、複合過去形は「近い過去」や「まだ完全に過ぎ去っていない期間」に起こった出来事を述べるのに用いられると説明している⁵⁾。Grevisse (1993)にも同じ説明が見られる。例を見てみよう⁶⁾。

- (3) Cette année l'hiver **a été** froid

this / YEAR / the / WINTER / **aux.pres** / **BE.pp** / adj. COLD

(Gougenheim, 1939: p. 209)

今年の冬は寒かった。

- (4) Aujourd'hui 5 janvier, je **suis parti** de Naples à sept heures du matin.

Adv (TODAY) / 5 / JANUARY / I / **aux.pres** / **DEPART.pp** / prep /
NAPLES / prep / adj (SEVEN) / O'CLOCK / prep / the / MORNING

⁴⁾ Vendler (1967)による動詞(句)分類 *activity* / *achievement* / *accomplishment* / *state* のうち、行為動詞 *activity* が複合過去形におかれると行為の目的が達成された後の状態を表すことが多い。

⁵⁾ 16-17世紀の文法家は、複合過去形を「単純過去」と呼ばれる過去形との比較することによって「まだ継続中の期間の出来事」ということばで表した。

しかし、この頃からすでに二つの過去形は厳密に区別されていず(C. Ayer (1900, p. 472)), 18世紀に入ると複合過去形の使用がさらに増えた。現代フランス語においては、複合過去は「パーフェクト」というアスペクトの機能を表す一方で、会話体や会話調の文においては、単純過去形に代わって過去の事態を述べるのに用いられる。(Brunot (1936), pp.473-475, Gougenheim (1939))。

⁶⁾ Gougenheim は単純過去形と複合過去形の用法に「遠い過去」と「近い過去」という対立を見出ししているが、その対立は必ずしも T_0 から見た現実の時間の遠近に対応しないことも指摘している。(1939: pp.209-210)

(CHAT., Voy. En Italie, 5 janv. 1804). (GREVISSE, 1993 : p. 1254)

本日1月5日、朝7時にナポリを出発した。

フランス語話者の一般的な解釈によると、(3)は春先に冬の寒さを振り返り、一種の抑揚を伴って語られるということである。発話者は「現在」を認識すると同時に「現在」に対立する「過去」を想定する。(3)のように、動詞句が「ある対象の本質的な属性」(冬は寒い)を語彙的に表し、それが、発話者の「現在」という期間内で捉えられた場合、その属性は「過去」における属性と比較して、相対的に述べられることになる。そこで、(3)は「今年の冬は例年に比べて厳しい寒さだった」というニュアンスを含んだ発話となるのである。

(4)は、ある地を出発したその日のうちに書かれた文である。これらの文では、文頭の時間表現は T_0 を含む期間を明示しており、事態はその期間内で T_0 に先行する時点に位置づけられている。発話者は T_0 を含む期間を「発話者を基準に構築される発話の現在」(Joly et O'Kelly, 1990: p. 196))と認識する。そこで、時間表現の表す期間は T_0 を含む期間として認識される。このような場合、複合過去形の表す事態が位置づけられる時点と T_0 は同一の期間内に含まれる。複合過去形は文法的機能として、 T_0 に対する先行性を表し、その機能に発話者によって構築された「現在」という意味が重なって、「現在続行中の期間の事態」という文の解釈が生じるのである。

もし、この文に「今日」という副詞がなく主語が一人称でない場合は、どうかあろうか。

(4') Le 5 janvier, Paul est parti de Naples à sept heures du matin.

1月5日午前7時に、ポールはナポリを出発した。

(4')は1月5日からかなりたった時点で発話された文と読むとする。時間表現によって、事行は過去の一時点に位置づけられ、三人称主語は、発話者以外の事行主体を表す。ここでは、発話の現在と対立する過去と、発話者である一人称と対立する三人称という二つの要素によって事行は発話空間と区別されているので、意味的に現在との結びつきは弱まる。したがって(4)に比べると、事行が T_0 を含む「現在」に起こったという解釈は難しくなる。しかし、この文は、 T_0 において主体の状態が認識されており、かつその状態に関連する過去の事態が問題に

されているような文脈で発話される。この場合にもやはり T_0 に事態認識の基準があるのである。逆に、過去の事態の主体が、 T_0 において認識されていない場合には、複合過去形は用いられにくい。たとえば、歴史に関する質問に答える際には用いられるが、純粹に客観的な記述を求められる歴史の文では用いられにくいことが傍証として挙げられる。

2. 発話時点と事態の意味的つながり

複合過去形は、過去の事態を T_0 に引き寄せて表す文法的機能を持つと言われるが、文に「現在」という期間を明示する時間表現がない場合、過去の事態と発話の現在の関連はどのように表されるのだろうか。

2.1 事行の完了に伴う発話者の認識上の変化

次の二例では、「忘れる」という動詞が複合過去形にされている。

- (5a) J'ai l'impression que vous **avez oublié** ce qui s'est passé au Rwanda.
 I / HAVE.pres / the / IMPRESSION / conj / you / **aux.pres** /
FORGET.pp / dem-pron / relat / clit / aux.pres / PASS.pp / prep / the /
 RWANDA

(Bouillon de culture)

あなた方はルワンダで起きた事を忘れているような気がします。

- (5b) Merde ! J'**ai oubliée** de leur dire pour leur paquet !
 HELL ! I / **aux.pres** / **FORGET.pp** / prep / them / TELL.inf /
 prep / their / PACKAGE

しまった！(彼らに)荷物のことを言い忘れた！

oublier 「忘れる」という動詞は「忘れる」主体と「忘れられる」対象が前提としてある。「忘れる」という事行は一旦成立すると、「思い出す」という次の事行を介することなしに、同じ対象物を再び「忘れる」ことはできない。「忘れる」という事行は、事行の最終局面においてのみ成立し、この意味において、(2)で見た限界動詞と同じ特性を有している。しかし、事行完了に伴う結果に関しては、「二通の手紙を書く」のような限界動詞句とは性格を異にする。いわゆる結果残

存の限界動詞と違って、ある対象物を「忘れる」という事行が完了すると、主体の知覚・認識からその対象物は消滅し主体に認識上の変化が生じる。一方、対象側には本質的变化は生じないが、本来、主体の認識の一部であるものが認識外におかれるという、主体の認識との関係においてのみ捉えられる変化が生じる。以上が「忘れる」という動詞が表す事行に内在する意味的特徴である。

複合過去形は、事行の完了とそれに続く段階を述べる文法機能を担う。したがって、複合過去形にされた「忘れる」という動詞は、主体の認識上の変化と、対象物の主体依存の変化を表す。では、この動詞の複合過去形は、実際にどのような発話状況において見られるのだろうか。

例文(5a)では、主節の動詞句 *J'ai l'impression que* (ような気がする)によって発話者の現在の婉曲的な態度が表現されている。仮に従属節を独立したひとつの文とした場合でも、現在において「忘れた」主体である相手には、認識上の変化が生じているのである。

さて、この文は、発話者から発話相手に対する一種の非難を伴って発話されたものである。発話者は「忘れられた」対象を、現在の話題との類推から重要であると主観的に判断し、現在、発話相手がその対象を「忘れている」という状態に焦点を当てて、この文を発話している。発話が発話相手の意識にもたらす効果として、発話相手の認識の外にある対象を喚起することになる。(5b)は「言うのを忘れた」結果、「彼らの荷物がおきざりにされたままである」といったような結果状態が現出していることを示している。事行主体は発話者であるので、事行の結果状態に焦点を当てると同時に次の「思い出す」という段階に至り、完了した事行の結果状態に対してある種の感情を向けることになり、文頭の間投詞が使用されることになる。

以上のことから、複合過去形は、事行が T_0 より前に変化したという事実と事行の最終局面およびそれに後続する局面を表すということができる。発話者は複合過去形を用いて、主観的な評価、判断をもとに認識した対象にかかわる過去の事態を語る。このように複合過去形による事態は現在の談話の焦点と密接につながっている。

2.2 過去の事態と発話者の現在の状況の因果関係

次の例では、複合過去形の表す事態と発話者を取りまく現在の状況が意味的につながっているものとして捉えられている。

- (6) Le problème, *c'est que je ne parle pas l'estonien* ; j'**ai eu** de mauvais professeurs à l'école.

the / PROBLEM / dem-pron / BE.pres / conj / I / adv.neg / SPEAK.pres /
adv.neg /

the / ESTONIAN; I / **aux.pres** / **HAVE.pp** / indef.pl / adj (BAD) /
TEACHER / prep
/ the / SCHOOL

(*Le Monde*: Dimanche 7-Lundi 8 mars 1999)

問題は、私がエストニア語を話せないということなのです。学校でよい先生にあたらなかったのです。

(6)の複合過去形の avoir は状態動詞であり、語彙的には事行の終結を含意しないが、状況補語(学校に通っていた頃)によって事行は時間軸上で限定されている。avoir の複合過去形は、過去のある一定期間を満たす等質で継続的な事行を表しているが、これを継続を表しうる複合過去形以外の過去形に代えると文は不自然になる⁷⁾。その理由として、発話者が複合過去形の事態と現在の事態の間に一種の因果関係を認めていることが挙げられる。発話者は、二つの状況を過去から現在という時間的順序に沿って捉えているだけでなく、過去の事態を現在の状況の原因として意味的に付け加える形でひとまとまりに認識している。つまり、過去の事態を単独で示しているのではなく、現在の状況と関連する事態として提示し、複合過去形を用いて、事行の完了がもたらした現在における結果を示しているのである。(6)のように状態動詞が複合過去形になる場合、発話者の主観的な認識によって、別の時に位置づけられた二つの事態は脈絡をなし、過去の事態は、現在の価値を持つ。

2.3 複数の事行間の意味連鎖

(7)は過去の継起する二つの事行の間の必然的な意味的連鎖を表している例である。

⁷⁾ 半過去(avais)に代えると文は容認されない。半過去については春木(1999)を参照した。

- (7) Il y *avait* un courant d'air dans le tramway. J'**ai eu** des frissons, mais c'est *passé*.

imp / pron / HAVE.Impf / a / CURRENT / prep / AIR / prep / the / TRAMWAY.

I / **aux.pres** / **HAVE.pp** / a / SHIVERS / conj (BUT) / dem-pron / BE.pres / PASS.pp

(Thérèse Raquin: p.10) (un courant d'air = (英/米) draught / draft)

市内電車の中に風が入ってきていた(から)。悪寒がしたけど、もう大丈夫だよ。

(7)の二番目の文の最初の複合過去形の動詞句は、語彙的に感覚的な意味を持つ事行を表す。この文には「悪寒を感じた」時間を限定する状況補語がないにもかかわらず、半過去形は容認されない(* J'*avais* des frissons, mais c'est passé)。なぜなら、(7)では「悪寒を感じる」と「悪寒がなくなる」という事行間の意味的連鎖と、ある事行から別の事行への移行が一つの文に表されており、後の事行は、前の事行が完了した結果もたらされた状態であるからである。このように事行の完了とその結果状態という連続は、複合過去形でないと表せない。

2.4 過去の事行に対する現在の主観的認識

小説においても、複合過去形の使用によって、語り手の視点が語りの現在にあることを示す例がある。

- (8) J'**ai eu** un moment d'espoir que je ne *peux* pas vous décrire parce que ce n'est pas possible.

I / **aux.pres** / **HAVE.pp** / a / MOMENT / prep / HOPE / relat / I / adv.neg / CAN.pres / adv.neg / you /

DESCRIBE.inf / conj (BECAUSE) / dem-pron / adv.neg / BE.pres / adv.neg / adj (POSSIBLE)

(La vie devant soi: p.16)

言い表すにも言い表しようのない希望(に満ちた)瞬間を味わった。

- (9) J'**ai eu** un moment l'impression ridicule qu'ils étaient là pour me juger.

I / aux.pres / HAVE.pp / a / MOMENT / the / IMPRESSION / adj
 (RIDICULOUS) / conj / they / BE.3.pl.Impf /
 loc-adv / prep / me / JUDGE.inf
 (*L'Etranger*, p.19)⁸⁾

彼らが私を裁くためにそこにいるのだ、というばかげた印象が、一瞬、私を捕らえた(窪田訳, p.13)。

(8)の動詞句は、語り手の「現在」の主観によって形容されている。このことは、関係詞節に評価、判断を表すモダリティ的な動詞が現在形に現れていることから明らかである。さらに、二人称代名詞によって、読み手への語りかけが明示されている(*je ne peux pas vous décrire...*)。すなわち(8)は言語レベルですでに語り手の現在の主観的態度が過去の事行に向けられていることが示されている。ここには二つの観点から語り手の現在の主観性が観察できる。まず、語り手の現在の感情(*pouvoir, être possible* の現在形)、次に、読み手に向けられた伝達の意図(*vous* による)である。これらは、*ton petit gilet du vendredi* (君の金曜日の素敵なベスト)のような名詞句が語彙的に含む主観的要素(*ton* 「君の」、*petit* 「かわいい」「いとおいしい」)と同様に語彙的な主観的要素である。この名詞句は、第三の主観性を表す要素として、発話者と発話相手に共通して習慣的に捉えられた「金曜日」を含んでいる。複合過去形の文においては、語り手が、読み手と共通の話題であると判断して焦点をあてる部分がこれに相当する。そこで、発話者が重要であると判断したことがらにかかわる過去の事態は、複合過去形で述べられる。その結果として、事態は現在とつながりを持つのである。

(9)の複合過去形の動詞も状態を表すが、これは半過去形に代えることもできる。この文に表されている「瞬間」は(8)と異なり現在の主観を表す語彙によって修飾されていない。心理的作用(「印象が自分を捕らえる」)が生じた瞬間は、過去のある一時点に位置づけられ、従属節が表す過去の事態による意味的限定を受けてその時点に固定されている。語り手は現在の主観的観点を提示しているのではなく、過去に抱いた心理的作用を T_0 から回顧しているだけである。そのため、(9)の複合過去形を他の過去形に代えても容認されるのである。

⁸⁾ カミュの「異邦人」(原題 *L'Etranger*)では、大部分において単純過去形の代わりに複合過去形が用いられているが、三人称主語をとる過去の行為と一人称主語の心的態度が共に語られている場面においては、単純過去形と複合過去形が使い分けられている。

2.5 3人称による過去の事態と発話状況における発話者の認識

最後に、文の主語が三人称の場合の複合過去形の用法について見てみよう。(10)は、あるコレッジにおける職業技術習得コースのクラスの担任教師が、自分のクラスの生徒による下級生への脅しを知り、クラス全員に厳重に注意する場面の発話である。

- (10) Un petit du cinquième *a eu le courage de m'avouer* qu'il avait été rackété par des élèves du quatrième techno. [...] Ce (ne) sont plus des conneries habituelles. [...]
 a / LOWER-CLASS PUPIL / prep / the / adj (FIFTH) / **aux.pres** / **HAVE.pp** / the / **COURAGE** / prep
 / me / **CONFESS.pp** / relat / HE / **aux.Impf** / **BE.pp** / **RACKETEER.pp** / prep
 / indef.pl / PUPILS / prep / the / adj (FORTH) / TECHNOLOGY. [...] dem-pron / (adv.neg) / **BE.pres** / adv.neg / indef.pl / **FOOLISHNESS** / adj (HABITUAL)
(Le plus beau métier du monde)
 第五学年のある生徒が第四学年職業技術学級の生徒にお金を脅しとられたと勇気を持って打ち明けてくれました。[...]もういつもの悪ふざけでは済まされないのですよ。

(10)の動詞句(*avoir le courage de*)「あえて～する、～する勇気がある」は、語彙本来の特徴として起動相を表す。起動相の事行が複合過去形をとると、複合過去形の事行完了、状態変化という文法機能が、事行の開始局面に焦点を当てることになり、主体の行為の開始を示す。この文の主語は不定冠詞のついた名詞句で表された三人称であることから、発話の際には、行為主体は発話の場に不在であり、かつ、発話者が発話相手の予期しない情報を伝えるという発話状況が含意される。上の文が実際に発話された時、発話者は、言語外状況を踏まえて、発話相手にある種の意図をもって事態を伝えている。発話者は、事態を肯定的に評価しつつ、事態の主体を発話相手と対比させながら、その事態に言及している。そこから、生徒の行動の結果として、発話相手に注意、警告が向けられるという意味効果が生まれている。この文の複合過去形は義務的であり、半過去形に代える

と不自然な文となる。なぜなら、この事態は、発話の現在の状況に新しい情報をもたらし、発話者と発話相手の認識に影響を与えているという観点から、現在とのつながりの中で述べられているからである。

3. まとめ

複合過去形の文法機能は、事行の完了とそれに続く結果状態を示すことにある。テンス的な価値としては、事態が発話時点以前に完了していることを示すのみで、複合過去形自体には、事態が完了した過去の時間軸上の一時点を特定する機能はない。

事態の完了に焦点を当てる複合過去形は、発話時点と時間的あるいは意味的に関連する過去の事態を表す。

過去の事態の解釈には、言語が語彙的、文法的に表す意味と、発話状況における言語外の要素が関連しているが、事態と発話時点の意味的つながりは、発話者の事態への関与の仕方によって決まる。そこでは、事態の談話上の価値と発話者の事態に対する主観的態度が問題になる。たとえば、事行の完了によって事行の主体が認識上の変化を被る場合は、発話者は主体の認識の変化に言及する。過去の事態と現在の状況との間に因果関係があったり、過去の複数の事態が意味的に連鎖している場合は、発話者は事態を現在の状況との関連において捉える。さらに、事態に発話者の現在の判断、評価が加わる場合には、発話者の果たす談話上の役割は大きくなる。

このように、複合過去形は、発話者の主観的な解釈によって、現在と関連するとみなされる過去の事態を表す時に用いられる。したがって、複合過去形の用法には、発話時点とのつながりを示唆する、いわば現在的意味が見い出されるのである。

今後は、過去の一時点を明示する副詞を伴う複合過去形の文の現在的価値について、現在形との共起、モダリティ的な語彙の意味の影響との関連において考えていきたい。

例文に付した gloss について

一般的によく使われている略語や本研究のテーマに直接関連しない文法的要素は省略した。

clt	: clitic pronoun
dem-pron	: demonstrative pronoun
imp	: impersonal
<i>Impf</i>	: <i>Imparfait</i>
ind	: indefinite article
ind-pron	: indefinite pronoun
loc-adv	: locative adverbial
pl	: plural
relat	: relative pronoun

参考文献

- ANSCOMBRE, J.-C. (1992): «Imparfait et passé composé: des forts en thème/propos », *L'information grammaticale* 55, pp. 43-53
- 青木三郎(1997): 「現代フランス語の「複合過去形」の考察(1)」, 『文芸言語研究』 23, pp.1-33
- AYER, C. (1900): *Grammaire comparée de la langue française*, 4^e éd., Bale, Genève & Lyon: Georg & C^o, pp. 472-473
- BENVENISTE, E. (1966): *Problèmes de linguistique générale* I, Paris: Gallimard
- BRUNOT, F. ([1922] 1936): *La Pensée et la Langue* – Méthode, principes et plan d'une théorie nouvelle du langage appliquée au français, 3^e éd., revue, Paris, Masson et Cie, pp. 324-327, 439-475, 765-778
- CORNU, M. (1953): *Les Formes surcomposées en français*, Bern: Francke, pp. 193-201
- GAREY, HB. (1975): «Verbal aspect in French», *Language* 33, pp. 91-110
- GOUGENHEIM, G. (1939): *Système grammatical de la langue française*, Paris: d'Artrey, pp. 206-211
- GREVISSE, M. (1993): *Le Bon Usage*, 13^e éd., Louvain-La-Neuve: Duculot, pp. 1254-1255
- GUILLAUME, G. (1993): *Leçons de linguistique de Gustave Guillaume 1938-1939*, Lille & Naval: Presses universitaires de Lille & Les Presses de l'Université Laval, pp. 226-229

- 春木仁孝(1999):「半過去の統一的理解を目指して」*Pour une compréhension intégrale et cohérente de l'imparfait français*, 『フランス語学研究』, 第33号, pp. 15-26
- JOLY, A. et O'KELLY, D. (1990): *Grammaire systématique de l'anglais*, Paris: Natan
- RIEGEL, M., PELLAT, J.-C., RIOUL, R. (1994): *Grammaire méthodique du français*, Paris: Presses Universitaires de France, p. 293
- SABELLI-BIAGINI, E. (1972): «Aujourd'hui et demain. «L'étranger» d'Albert Camus: lecture du jeu temporel», *Lingua et stile*, anno VII, Societa editrice il Mulino, pp. 377-390
- VASSANT, A. (1988): «Passé simple et passé composé chez E. Benveniste et G. Guillaume», *Modèles linguistiques* 19, pp. 113-129
- VENDLER, Z. (1967): «Verbes and Times», in *Linguistics in philosophy*, Ithaca-New York: Cornell University Press, pp. 97-121
- VET, C. (1992): «Le passé composé: contextes d'emploi et interprétation» *Cahiers de praxématique* 19, pp. 37-59
- WILMET, M. (1992): «Le passé composé, histoire d'une forme», *Cahiers de praxématique* 19, pp. 16-30

例文出典

- Camus, Albert, *L'Étranger* ([1942] 1998). Paris: Gallimard.
- Gary, Romain (Ajar, Emile), *La vie devant soi* (1975). Paris: Mercure de France.
- 異邦人([1954] 1999). 窪田啓作訳. 東京:新潮社.
- Bouillon de culture* (1999). France 2, 1999. 4. 16放送.
- Le Monde* Dimanche 7-Lundi 8 mars 1999.
- Le plus beau métier du monde* 1996年仏映画.
- Thérèse Raquin* (1994). Paris: L'Avant-Scène, N° 433, 1953年仏映画.

出典を明記していない例文はフランス語話者の日常会話から収集した。